**日本神話：ヤマサチヒコとウミサチヒコ**

コノハナサクヤとニニギの3人の子供たちのなかには、狩猟の達人に成長するヤマサチヒコと熟練の漁師となるウミサチヒコがいました。ある日、ヤマサチヒコはお互いの仕事を知るために2人の道具を交換することを提案します。ヤマサチヒコは兄の釣り針を持って釣りに出かけ、ウミサチヒコは狩りに挑戦しました。しかし、ヤマサチヒコは借りていた釣り針を失くしてしまい、それはどれだけ探しても見つかりませんでした。ヤマサチヒコは刀を折って新しい釣り針を何本も作りましたが、ウミサチヒコはそれを受け取ることを拒みました。

途方に暮れていたウミサチヒコのもとにシオツチという名の老人が訪ねてきて、船に乗り込んで海の神であるワダツミの宮に行き、釣り針を探すように言いました。ヤマサチヒコは言われた通りにし、宮殿に到着すると、ワダツミの娘であるトヨタマ姫と出会います。2人は恋に落ち、ワダツミは、ヤマサチヒコが神の家系であることから2人の関係を認めました。ヤマサチヒコは大宴会に招かれ、やがてトヨタマと結婚します。2人は3年の間、幸せに暮らしました。

時が経つにつれ、ヤマサチヒコは不安を募らせていきました。元々、失くしてしまった兄の釣り針を見つようとして海に出たことを思い出したのです。トヨタマは父に捜索を手伝ってほしいと頼みます。ヤマサチヒコが探している釣り針を見つけようとしたワダツミは、海にいるすべての魚たちを宮殿に集めるように命じました。口を痛めたという鯛を除いて、すべての魚が集まりました。ワダツミが鯛を呼び寄せると、その痛みは釣り針が引っかかっていたせいだと判明し、ヤマサチヒコにはそれが兄の釣り針だと分かりました。

兄の釣り針を取り戻したヤマサチヒコは、陸に戻ることを決意します。別れの品として、ワダツミはヤマサチヒコに潮を操ることのできる一対の宝珠を渡しました。ヤマサチヒコはウミサチヒコに釣り針を返そうとしますが、ウミサチヒコはそれを断り、弟を脅しました。ヤマサチヒコは海の神からもらった宝珠を使って潮を呼び寄せてウミサチヒコを溺れさせ、ついにウミサチヒコは屈します。

宮崎県沿岸部には、この物語の登場人物を神格化して祀っている神社がいくつかあります。その中のひとつである青島神社では、毎年冬に行われる祭りで、ヤマサチヒコがワダツミの宮から帰還して、歓喜に沸く人々に海辺で迎え入れられるシーンを再現しています。ふんどしのみを身に付けた参加者たちが冷たい波の中に走り込んでヤマサチヒコを迎え、禊の儀式を行います。